

令和5年東京都輸血状況調査集計結果(概要)

1 調査対象・回答率

(1) 目的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対象

都内にある病床数20床以上の医療機関：635箇所、令和5年1月～12月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メール、ファクシミリのいずれかとした。

※令和5年調査より、精神科・神経科・心療内科単科医療機関も対象とした。

(3) 結果

548機関(回答率86.3%) (前年：606機関中514機関 同84.8%) から回答が得られ、うち一般病床100床以上の機関は201機関(同93.9%)であった。

得られた回答は「令和5年輸血状況調査集計結果(概要)」としてまとめるとともに、100床以上の201機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報告

「令和5年輸血状況調査集計結果(概要)」 「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100床以上の201機関については、「令和5年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」(個票)を作成し送付する。

2 集計結果の概要(項目別)

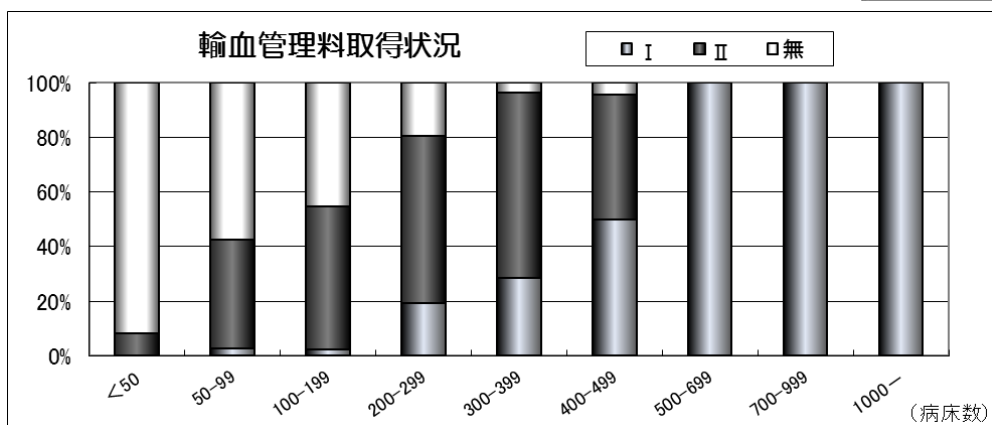
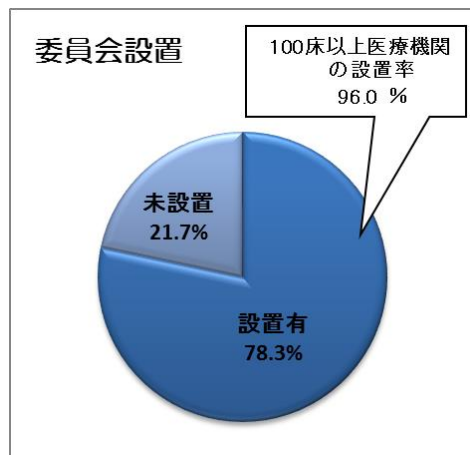
(1) 輸血療法委員会の設置状況

委員会を設置している医療機関は、429機関(78.3%)であった。
(前年416機関 80.9%)

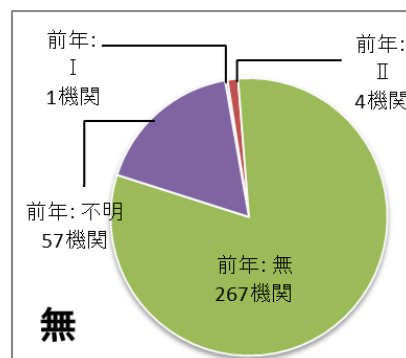
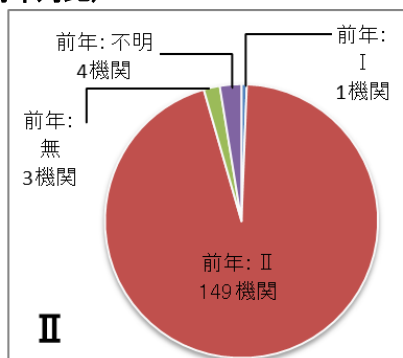
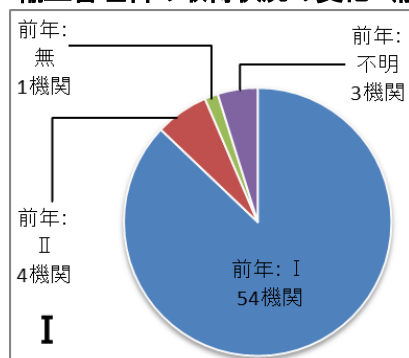
一般病床100床以上の201機関で見ると、委員会設置は193機関(96.0%)であった。(前年193機関 96.0%)

(2) 輸血管理料(I・II)の取得状況

取得機関は219機関(40.0%)で、内訳はI：62機関、II：157機関であった。(前年220機関42.8% I：58機関、II：162機関)



輸血管理料の取得状況の変化(前年対比)



(3) 院内採血の状況

院内採血はなく、前年と同様である。

(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア 赤血球製剤の使用量は 683,713U で、前年 649,455U より増加した。

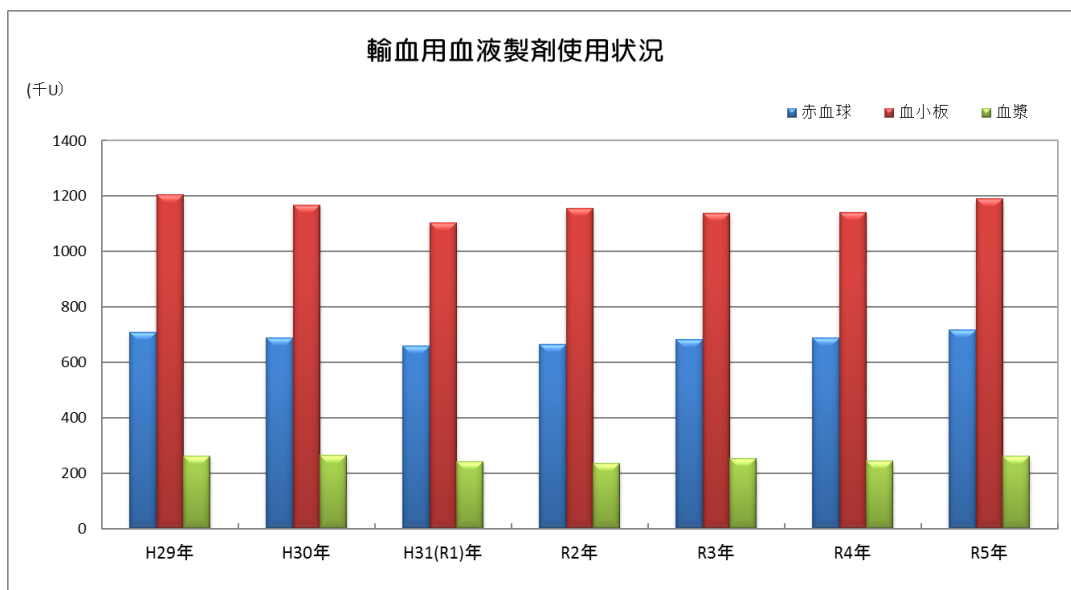
イ 血小板製剤の使用量は 1,190,100U で、前年 1,141,056U より増加した。

ウ 血漿製剤の使用量は 261,683U で、前年 244,525U より増加した。

エ 全血製剤（日赤製）の使用はなく、前年と同様である。

オ 白血球濃厚液の使用は 5 機関あり、使用対象は顆粒球輸血（5 人）、ドナーリンパ球輸注（11 人）であった。

カ 同種クリオプレシペート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240 から 125 本（7 機関）、LR480 から 1,344 本（8 機関）であった。



(5) GVHD 予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院 417 機関中の全てが照射血を使用しており、前年の 100%と同様である。

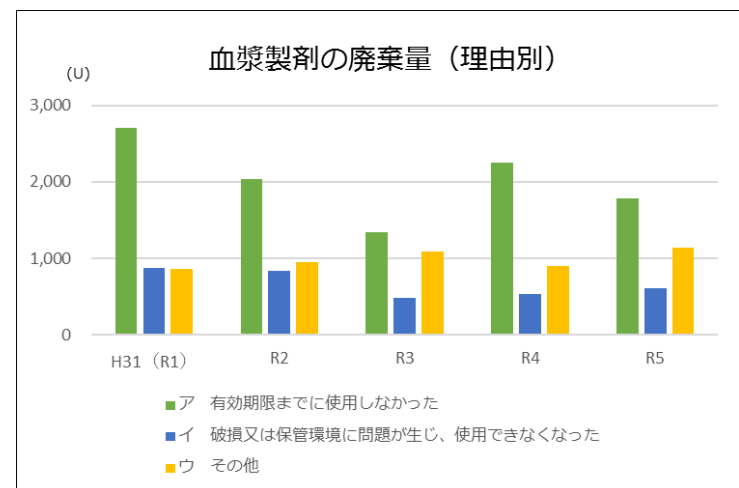
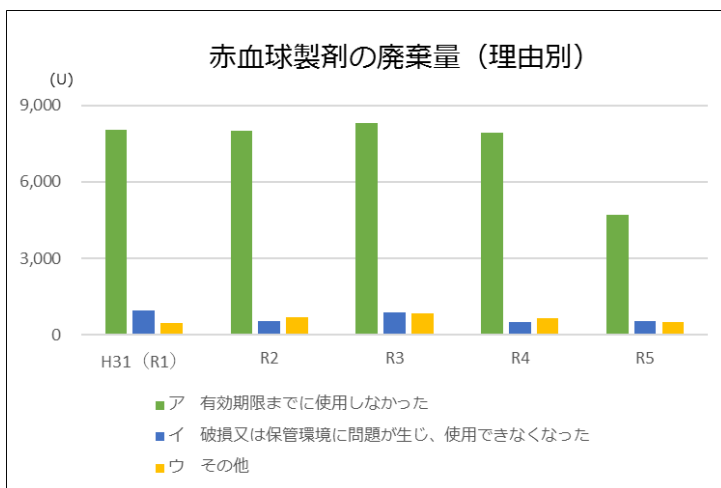
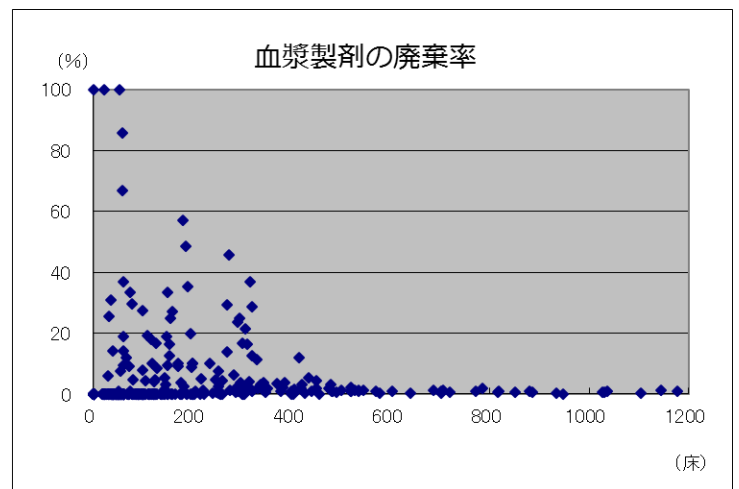
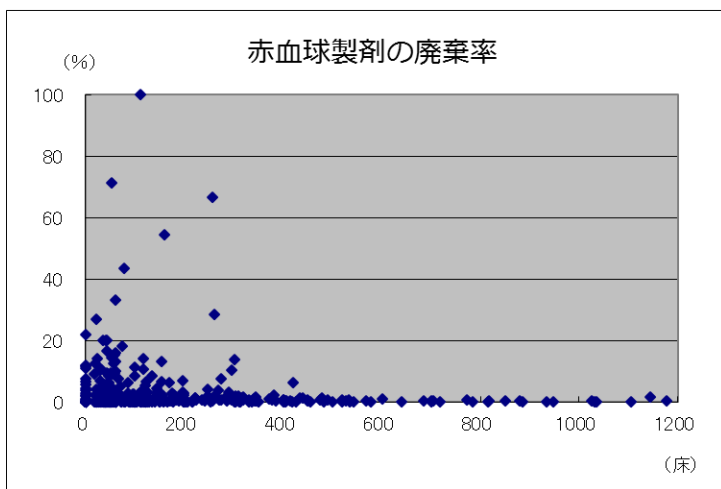
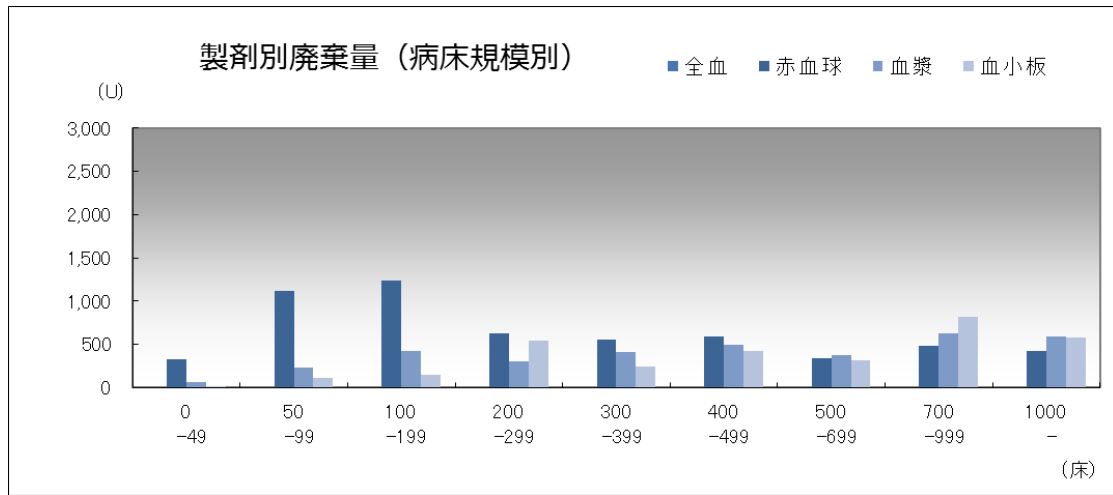
(6) 製剤別購入・廃棄量の状況

ア 全血製剤は、前年と同様、購入・廃棄ともになかった。

イ 赤血球製剤の廃棄率は 0.8%(5,734.5U) で、前年 1.4%(9,091U) より減少した。

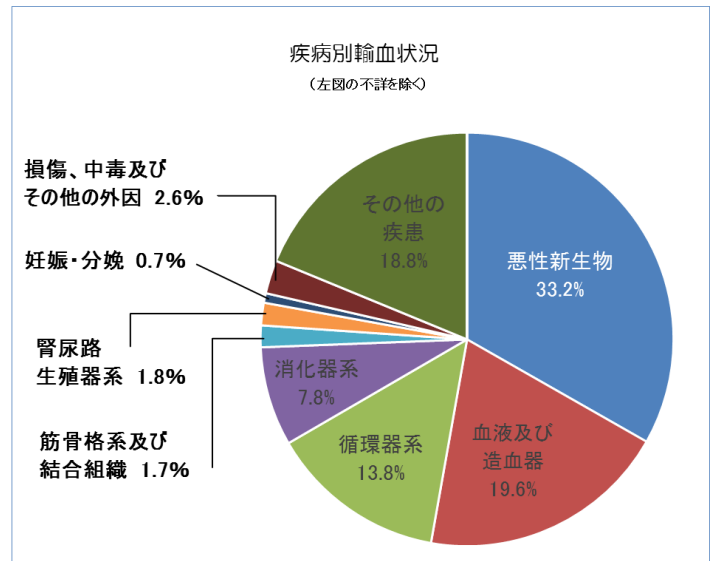
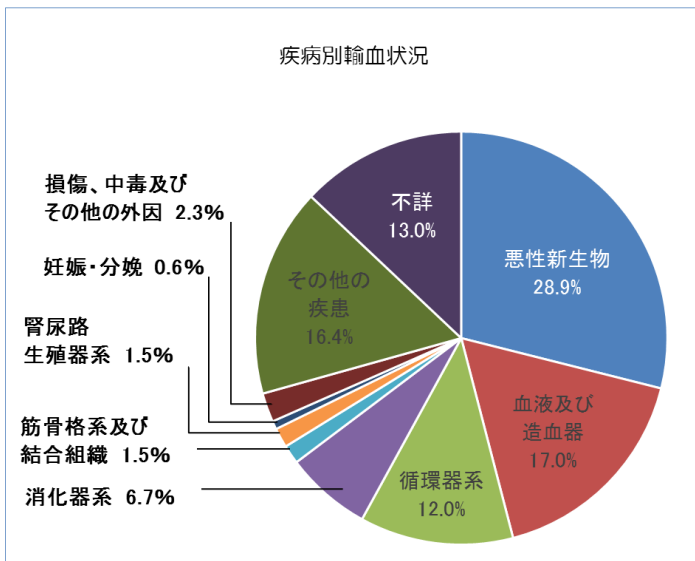
ウ 血小板製剤の廃棄率は 0.3%(3,222U) で、前年 0.3%(3,245U) と横ばいである。

エ 血漿製剤の廃棄率は 1.3%(3,529U) で、前年 1.5%(3,675U) より減少した。



(7) 疾病別及び年代別輸血状況

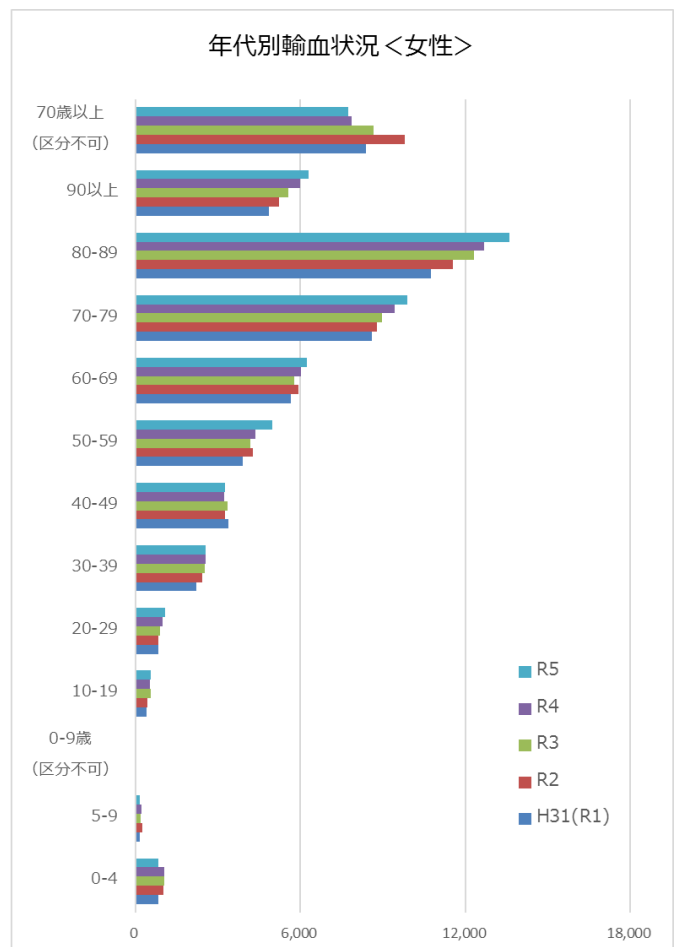
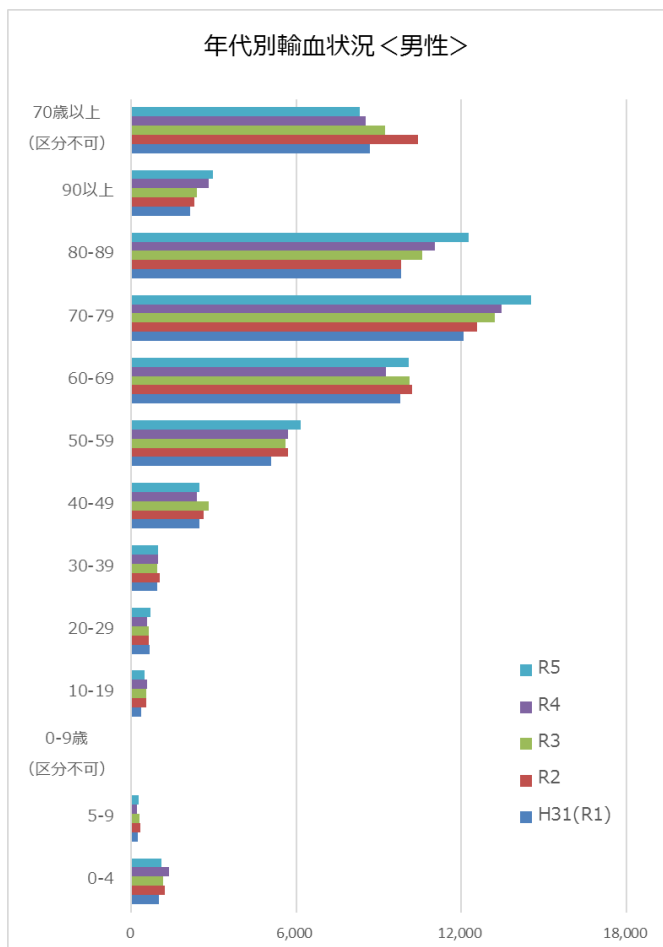
・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の33.2%が使用されており、前年(35.1%)とほぼ同様である。

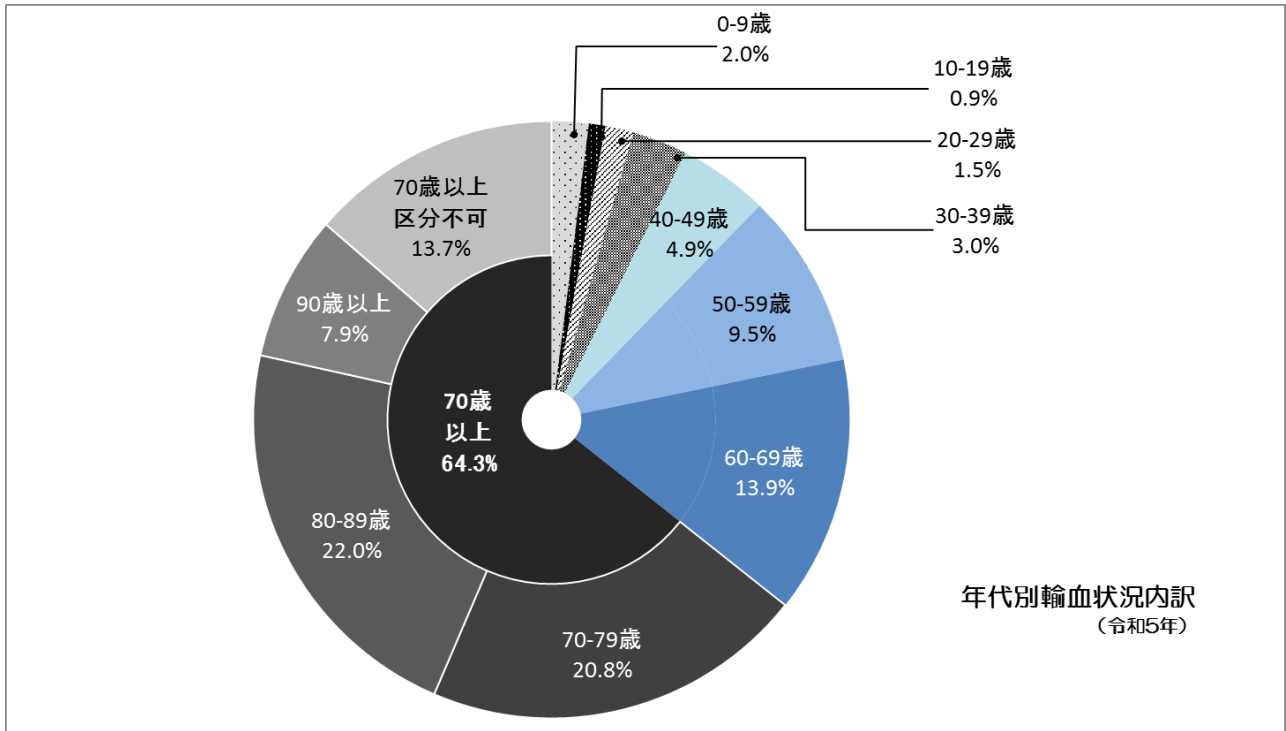


※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計必ずしも100とはならない。

・年代別では、50歳以上の患者への使用が全体人数の87.7%、60歳以上 78.2%、70歳以上 64.3%で、いずれの区分でも前年(50歳以上86.8%、60歳以上 77.8%、70歳以上 64.2%)とほぼ同様である。

※同一人について:30日間の複数回使用は1人としてカウント。70歳以上で10歳ごとに区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。

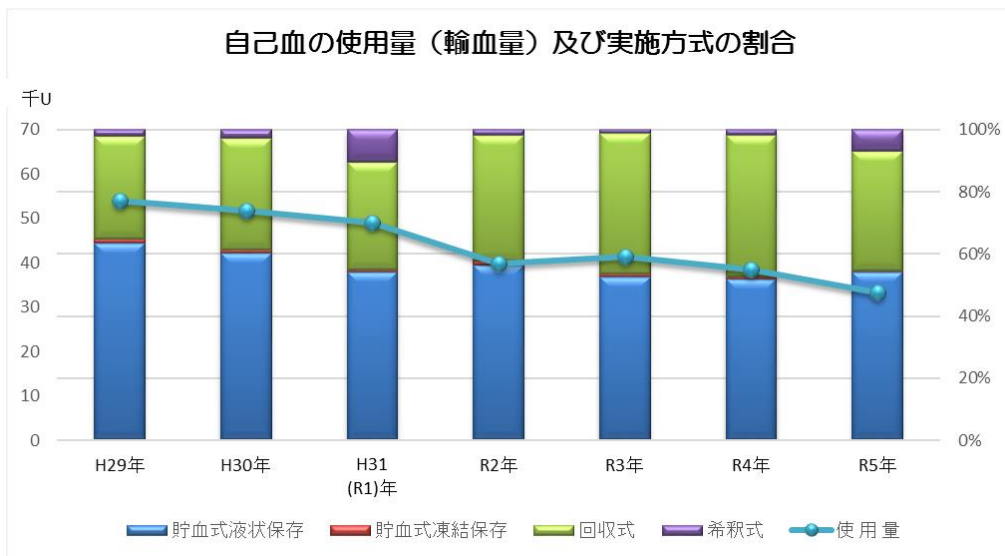




※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は33,248.0Uで、前年(38,557.1U)より減少した。

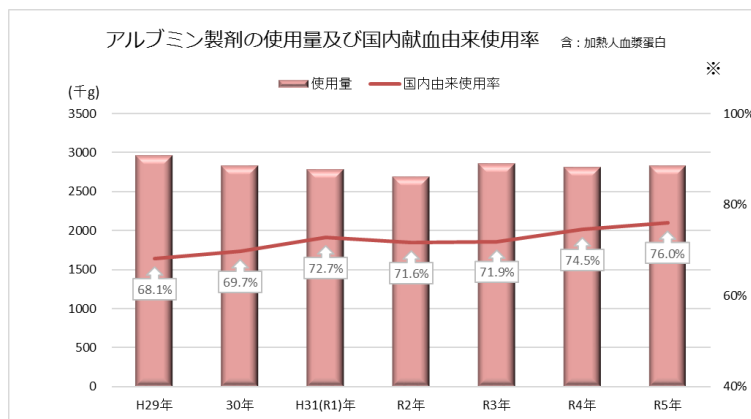
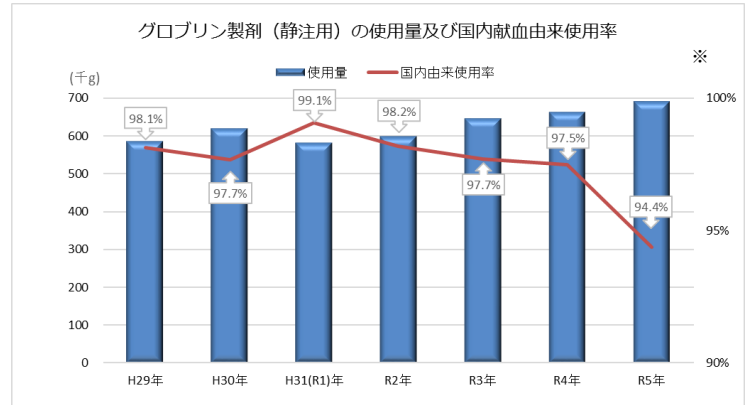
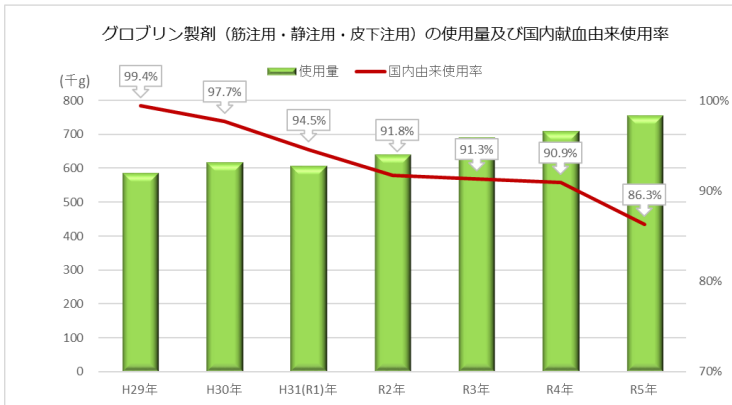


(9) 血漿分画製剤の使用状況

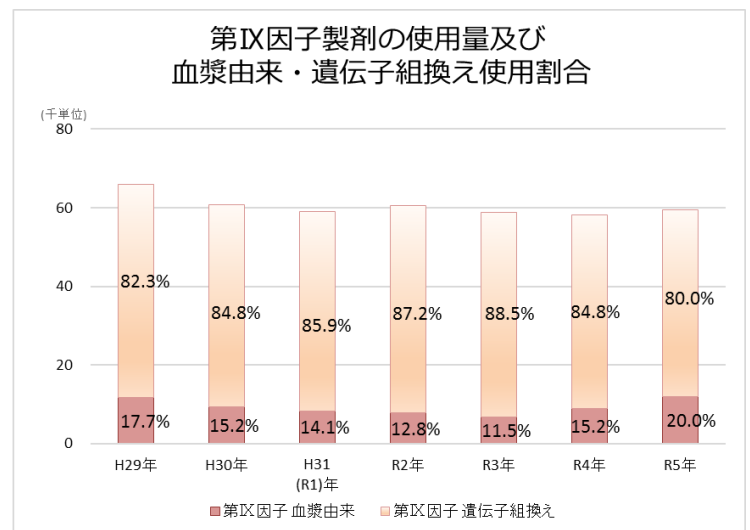
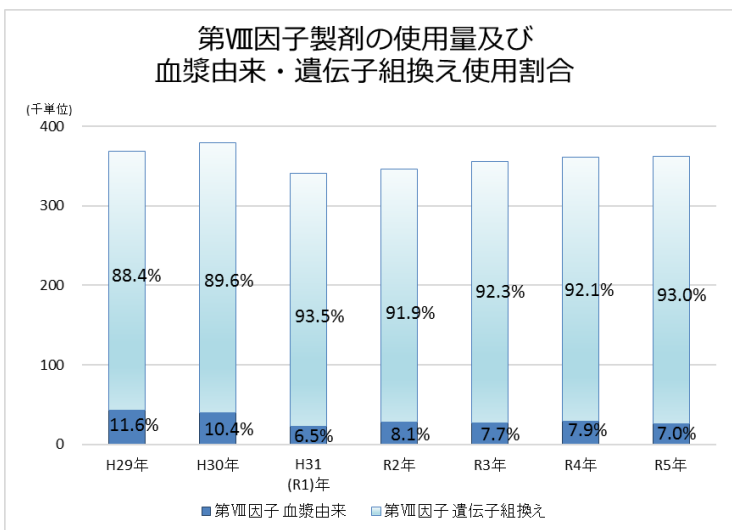
血漿分画製剤（組織接着剤を含まない。）の使用量は483,365本で、前年（475,605本）より増加した。グロブリン製剤全体（特殊グロブリンを除く。）の使用量における国内献血由来使用率の割合は86.3%（652,379.5g）で、前年90.9%（644,996.0g）より国内自給率は減少した。

グロブリン製剤（静注用）の使用量における国内献血由来製剤の割合は94.4%（652,379.0g）で、前年97.5%（644,989.0g）より国内自給率は減少した。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用量における国内献血由来製剤の割合は、76.0%（2,146,409.3g）で、前年74.5%（2,092,230.4g）より国内自給率は増加した。



※平成30年から「静注用 規格20g」（国内外由来あり）を追加、令和元年（平成31年）から「皮下注用 規格1g・2g・4g」（全て国外由来）を追加
 ※令和5年から国内献血由来使用率の算出方法を、使用本数による算出から使用量による算出に変更した。



※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1単位=250IU